

＜令和四年度日本語学校教育研究大会趣旨＞

大会テーマ『日本語学校制度化時代－わたしたち「日本語教師」はどう生きる？』

大会委員長 佐久間みのり（学校法人石川学園横浜デザイン学院）

令和の幕開けとともに始まった新型コロナウイルス感染症の影響により、今まで当たり前であったものが一変し、授業も、学校も、教師も、職員も、学習者も、それぞれが変化を迫られる日々でした。本研究大会も、以前は夏季休業期間の前後である7月から8月に開催をしておりましたが、コロナ禍での大会の実施形態を模索した結果、年度末にオンラインで開催するという変化が起きました。令和二年度、三年度の大会テーマも『日本語学校教育の挑戦－with コロナ・post コロナ・そして New normal へ』と、新しい時代へともに向かい、コロナ後の時代を一緒に作っていかうという一日本語教師である大会委員の気持ちを込めたものでした。しかし、今年度入国制限が緩和されたことにより日本語学校には留学生とともに、以前と同じような慌ただしい毎日が戻り、その対応に追われる日々を多くの日本語教師が過ごしているのではないのでしょうか。

一方で、この間の日本語学校を取り巻く別の変化について、私たちは向き合っていく必要があります。それは日本語学校や日本語教師に関する法整備です。この制度化時代に私たち日本語教師はどう生きていくべきか、私たちは今こそこれまでの教師としての自分自身の在り方や学校での日本語教育実践を振り返る必要があると感じます。そのような理由から本大会の新しいテーマを『日本語学校制度化時代－わたしたち「日本語教師」はどう生きる？』といたしました。

本大会の午前中は、文化庁から講師をお招きし日本語教育施策の動向についてお話し頂きます。また同時に文化庁の令和三年度補正予算事業として実施された「ウィズコロナにおけるオンライン日本語教育実証事業」について、実施校や実施団体から実施報告をしていただき、コロナ禍で残されたオンライン教育とのこれからの向き合い方を考えていきたいと思っております。

午後からは制度化時代に私たち日本語教師が持つべき理念や在り方のきっかけになる視点について、早稲田大学の舘岡洋子氏、東京大学の宇佐美洋氏、カイ日本語スクールの山本弘子氏からお話しいただきます。またその後は参加者同士が大会1日目の様々な視点について語り合えるセッションも予定しております。

なお、これまで日本語学校教育研究大会の会期は2日間でしたが、夏季開催への移行期間としてこの2月に単日開催を1回、続けて8月にも単日開催を行います。

また、今後の開催方法についてはオンラインだけではなく対面・ハイブリッドの可能性も含め検討をしております。

New normal を経て新しい時代が訪れようとしています。新しい時代を一緒に迎える仲間とともに、新時代の日本語学校を考える場にしていきましょう。